

図画工作科

自分らしく表現する子どもの姿をめざして

—「驚き」と「感動」の体験を通して—

中島敦夫

1 はじめに

附属三原学校園図画工作・美術部会では、3H美術教育¹⁾の理念のもと人間力の形成をめざして、子どもたちに美意識を育む取り組みを行ってきた。3Hとは、「Heart/感じる力, Head/考える力, Hand/みる・かく・つくる力」であり、知性、感性、技能につながるものである。そして、この3つを相関的に関わらせることによって子どもたちの美意識を育むことをめざしてきた²⁾(図1)。

これまでの取り組みの中で常に願いとしてあったのは、子どもたち一人ひとりが「自分らしく表現活動を行ってほしい」ということであった。美意識を身に付けていく中では、子どもたちが自分らしく表現をしていくということは欠かせないことである。そして、その原動力となっていたのは、子どもたちのこころの奥底から湧き上がる「驚き」と「感動」の体験である。「驚き」と「感動」の体験を通して子どもたちが自分らしく表現していけるような題材開発を行いたいという思いから本研究テーマを設定した。

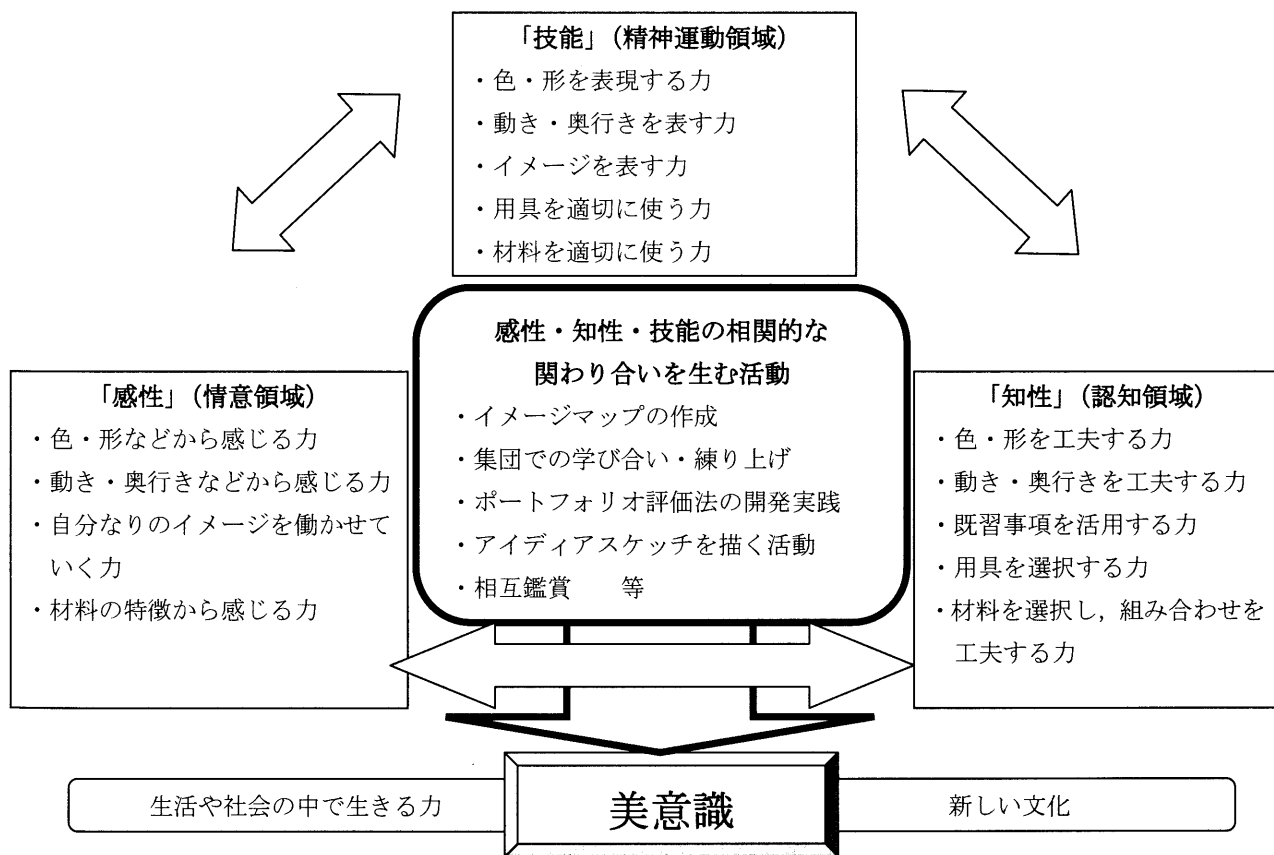


図1 美意識が育まれる過程

2 研究の目的

本研究の目的は、子どもたちが自分らしく表現できるような題材を開発実践し、活動において自分らしく表現できたかを検証することである。

3 研究の方法

(1) 自分らしさの定義

自分らしさとは、様々なところで使われ定義が曖昧な言葉であるが、佐々木（1995）によると「伝えたいものは自分自身であり、自らのものの『見方』や『考え方』、『生き方』といったようなものを『自分らしさ』として色や形の材質などに託し、主観的に表現することである。」³⁾とある。人と違った表現を自分らしさとするのではなく、子どもたちが製作過程を通して、作品に自分の思いを込めて作ることができたかどうかを本研究における「自分らしさ」としていく。

(2) 自分らしく表現をするための方策

① 「意外性」のある題材・学習展開の工夫

子どもたちにとって「意外性」のある題材を提示し、学習展開を考えることで学びの過程の

中で「驚き」と「感動」の体験を生じさせることができる。この「驚き」と「感動」の体験はこころの奥底で生じるものであり、「知性」と「感性」を合わせた人間性全体に関わるものであるとされている⁴⁾。また、子どもたちが、「驚き」と「感動」を求めて自分らしく表現するために自ら学習課題を設定していくようにする。そうすることで「技能」も相関的に関わらせていく。

② タクソノミーテーブルの開発実践

附属三原学校園図画工作・美術部会では、評価の指標としてタクソノミーテーブル（表1）を作成している。

このタクソノミーテーブルは、ブルームの提唱した評価の考え方で、現行学習指導要領の観点別評価4観点はこのタクソノミーを応用して設定されている⁵⁾。タクソノミーでは教育目標が以下の3つの領域に整理されている。

- 認知領域：知識の記憶や活用からなる
 - 精神運動領域：運動技能や操作技能からなる
 - 情意領域：興味、態度、価値観の変容からなる
- これに、クラスウォールらによって継承・発

表1 図画工作・美術科のタクソノミーテーブル

	知識の次元	認知プロセス次元		
		1 思い出す/理解する	2 応用する/分析する	3 評価する/創造する/内面化する
認知	事実的知識 (美術用語、造形の要素と原理)	これまでの記憶から、美術用語や造形の要素と原理を想起して、新しい学習内容に関連づけている。	制作や批評・鑑賞の活動において、状況に適した美術用語を用いたり、造形の要素と原理を活用したりしている。	制作や批評・鑑賞の活動を通して、美術用語や造形の要素と原理に関する新しい認識を獲得している。
	概念的知識 (題材のテーマのコンセプト)	題材のテーマのコンセプトを認識・理解している。	制作や批評・鑑賞の活動において、題材のテーマのコンセプトを同定し、関連性を判断している。	題材のテーマのコンセプトをベースにしながら、制作や批評・鑑賞の活動において、自分自身のコンセプトを深めている。
精神運動	手続的知識 (表現の技術と技法、批評・鑑賞の方法)	技法・技術を理解し習得する。 批評・鑑賞の方法を理解し習得する。		習得した技法・技術を自らの制作に応用している。
情意	感情の次元	情意プロセス次元		習得した批評・鑑賞の方法を自らの批評・鑑賞に応用している。
	興味・関心・態度	1 受容する/反応する	2 価値づけする/組織化する	
	美的な価値観(美しさやよさに関する価値の意識や感情)	美的な現象や存在を受け入れようとしたり、それらに対して注意を向けたりしている。 美的な現象や存在との出会いから、自分の持っている価値の意識や感情を喚起している。	美的な現象や存在に見出される価値を認め、その価値を自分の持っている価値の意識や感情との関連で吟味している。	制作や批評・鑑賞の活動を通して、よさや美しさに対する価値の意識や感情を再構成している。
メタ認知	メタ認知の次元	1 思い出す/理解する	2 応用する/分析する	自分らしさや改善点の認識に基づいて、自分なりの美意識を形成したり深めたりしながら、制作や批評・鑑賞の活動に取り組んでいる。
	自己知識	ポートフォリオ等からこれまでの学習を思い出している。	制作や批評・鑑賞において自分らしさが表れている点を分析している。	
	自己調整		制作や批評・鑑賞において改善すべき点を見出している。	

展させた「新タキノミー」の考え方をもとにして本学校のタキノミーテーブルのもとを作成した。なお、子どもたちの「自分らしさ」を大切にするために「メタ認知」の視点を付け加えて独自のものになっている。

(3) 検証にあたって

子どもたちが「自分らしく」表現することができたかを以下の視点で検証する。

①質問紙調査の実施

事前事後に質問紙調査を行い、子どもたちの変容を分析する。

②行動観察及び振り返りや作品分析

授業時の行動観察をタキノミーテーブルに沿って行ったり、振り返りや作品分析を行ったりして、子ども達の思いがどのように込められていたかを分析する。

4 実践事例

(1) 題材名

「段ボール筆のアーティストたち」

(2) 授業実施学年及び人数

小学校第5学年、76名

(3) 実施時期

平成24年2月

(4) 題材について

筆といえば、動物の毛を集めて穂先にしたものを想像するが、自分の手足に直接絵の具をつけて使ったり、わらを筆に見立てて描いたりするなどその種類は多様にある。様々な描画材料に出会うことで子どもたちは、関心を示し、そこから生み出される線から想像を広げて活動をする。本題材では、段ボールを丸めて、先をはさみで切って束に切って筆にした段ボール筆⁶⁾を使う。段ボール筆を使って、友だちと線と形のリレーをしながら、画面に描かれた線や形からお互いに想像をして、線や形を付け加えて「冬」を表していく共同制作を行う。友だちとの考え方の差異を感じとる中で、どのように表すか判断をし、自分なりに工夫しながら表現していく

ことをねらいとしている。

(5) 児童について

子どもたちの日ごろの活動の様子を見ると、自分の表現したいことがあっても、高学年になり他者の目が気になって表現をするまでにためらいがあったり、迷いがあったりする姿が見られる。また、すぐに仲のよい友だちや近くの席の友だちの作品を真似する傾向があり、「自分らしく」表現しているとは言えない現状がある。アンケート（平成24年1月19日実施 37名）によると「自分らしく表現することができるか」という設問に対して、肯定的回答が63%にとどまっており、自分の表現に対して自信を持っておらず、自分らしさを見失っている子どもが多いことが分かった。

(6) 指導にあたって

第1次では、自分で段ボール筆を作り、試しに描く活動を行う。道具を大切にすることを育てるとともに、筆の持つ特性を捉えることができるようにしていく。この時に穂先の切り込みの幅などは子どもたちに任せ、世界で一つの筆を作っていくようにする。第2次では、基底材として黄ボール紙を使う。黄ボール紙は、紙質が丈夫なために段ボール筆の筆圧にも耐えることができる。また、紙自体に厚みがあるために作品を立たせて鑑賞を行うことが可能である。着色では、たんぼを使い、段ボール筆の線に独特のタッチでアクセントを加えることができるようにする。

(7) 題材の目標

- 段ボール筆から生まれる線に興味を持ち、すすんで表現するようにする。（造形への関心・意欲・態度）
- 線や形から想像を広げながら、自分の表したいことを思いつくようにする。（発想や構想の能力）
- イメージに合わせて線や形を描いたり、着色したりするようにする。（創造的な技能）
- 線や形の使い方、配色などの工夫を伝え

合いながら、お互いの表現のよさを見つけあうようにする。(鑑賞の能力)

線の形や描く時の勢いなどを工夫しながら風の吹く様子を表現した。また、第2次の活動につながるようにたんぼを使って着色の練習も行った。

(8) 題材のタキソノミーテーブル

表2参照

(9) 題材の計画

指導時数・・・全3時間

第1次 段ボールの筆！？(2時間)

第2次 段ボール筆でリレー！？(1時間)

(10) 学習の実際

〈第1次〉段ボールの筆！

初めにダンボール筆を作る活動を行った。子どもたちにとってダンボールで作る筆というのは体験したことがないものである。本当に字や絵が描けるのか半信半疑のまま作っていた。筆を手順に沿って作った後、描き心地やどのような線が生まれるのかを知るために試し書きを行った。子どもたちは筆から生まれる大胆な線に喜びを感じながら、文字などを書いていた。その後、冬の風を描こうと呼びかけ各自が思い思いに筆をキャンパスの上で走らせた(図3)。



図2 試し書きの様子

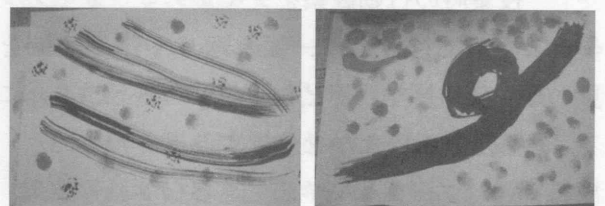


図3 児童作品(第1次)

表2 題材「ダンボール筆のアーティストたち」のタキソノミーテーブル

認知領域	知識の次元	認知プロセス次元		
	事実的知識 (美術用語、造形の要素と原理)	1 思い出す/理解する	2 応用する/分析する	3 評価する/創造する/内面化する
	概念的知識 (題材のテーマのコンセプト)	③冬のイメージに合うように線や形からイメージをする。 「この線は〇〇に見えるな。」 「〇〇にしたいから、線を書きたそう。」 ※題材終了後に・・・ 本題材をきっかけにして、自分なりに表現していこうという気持ちを高めよう。 「次の学習では、もっと自分のやりたいことをやってみよう。」		
	手続的知識 (表現の技術と技法、批評・鑑賞の方法)			
情意領域	感情の次元	情意プロセス次元		
	興味・関心・態度	1 受容する/反応する	2 価値づけする/組織化する	
	美的な価値観(美しさやよさに関する価値の意識や感情)	①②ダンボール筆を使った造形活動に興味を持つ。 「ダンボールで描かけるの？やってみたいな。」		
メタ認知	メタ認知の次元	1 思い出す/理解する	2 応用する/分析する	
	自己知識	③できた作品を見て、自分らしさが表れている点を感じ取る。 「ここに自分らしさが出ているな。」		
	自己調整			



※表中の丸数字は、指導の何時間目にあたるのかを示す。

〈第2次〉段ボール筆でリレー！？

導入では、教師と数名の子どもで「線と形のリレー」を実演して見せた。ここで生まれたそれぞれの線が何に見えるのか話し合った。同じ線の見合わせでも、子どもによってとらえ方はさまざまであった。そこから、見方は各自それぞれのものであることを確認し、お互いの感じ方の違いを楽しみながら、自分なりに「線と形のリレー」として表現していくことを提案した。なお、テーマとして、前時で用いた「冬の風」を設定した。冬の風が運んできたものという共通点を設けることによって、お互いに共感できるポイントを設定した。（手順とルールは以下を参照。）

手順

- ①「冬の風」を一人一本かく
- ②線をしっかりとみて、イメージをする。
(360° いろいろな角度からみる)
- ③テーマに合うように、想像しながら線や形を描いてつないでいく。(30秒で次の人と交代)
- ④最後にみんなで描き加えたり、色つけをしたりする。(相談OK)

ルール

- ・無言で行う。(手順①～③)
- ・お互いの表現をしっかりと見ながら行う。



図4 「線と形のリレー」の様子

子どもたちは手順に沿って活動を行った。集中して行うため活動中は、無言のルールであったが、自分の考えていなかった線や形が出た時

には、思わず驚きの声漏れることがあった。画面や相手の表情を見て、お互いの表現したいことを考慮しつつ、自分の表現を黙々と進めていた。そして最後の着色では、お互いの考えを合わせながら、仕上げを行った。

活動の最後には、各自が色違いの付箋を持ち自分の描いたところに名前を貼った。全体の中の自分の表現を再確認し自分なりの工夫やこだわりを感じ取ることができるようにするためである。

5 考察

(1) 質問紙調査から

「作品作りの中で自分らしく表現することができている。」という設問に対して表3のような結果が出た。

表3 アンケート結果（肯定的評価の割合）

事前	事後
63%	84%

肯定的評価が伸びた理由として、活動の工夫も挙げられるが、授業の中で「自分なりの表現」の定義にふれたことも挙げられる。線と形のリレーの時に「人と違った特別なことをしなくても、自分の思いや判断がこもっていれば、それは自分の表現ということができる。」ということ子どもたちは実際に活動の中で実感した。

また、「次はどんなことを描きたいですか。」（自由記述）に対して、以下のように発想豊かにたくさんのことを記述した。これらのことから子どもたちは、自分らしく表現をすることの意味を感じることができた。

自由記述の内容

- ・もっと雪を降らせたい。・節分
- ・こたつなど人があったまっている様子。
- ・子どもや犬が雪で遊んでいる。
- ・スキー ・こおり・夏もやりたい 等々

(2) 子どもたちの作品から



図5 作品名「雪だるまコロコロ」



図6 作品名「たくさん冬の冬」

本題材では、図5、6にあるような作品が出来上がった。これらの作品に共通していえるのは、冬を題材としており、特別に違ったモチーフはないものの、それぞれに子どもたちの思いがこもっているということである。子どもたちのこれまでの経験と画面上の線や形を組み合わせることによって作品は表されている。また、図6にあるようにみかんを鏡もちの上に描くと、それを次の子が画面の右上に描くといったように、前の表現を取り入れながら自分の表現に生かした子どももいる。これは、真似ということではなく、自分らしい判断が入った表現ということができるであろう。このような過程を繰り返しながら、子どもたちは自分らしい表現を追求した。

6 おわりに

今回は、「自分らしさ」ということをテーマにして実践を行った。「自分らしさ」とは、よく使う表現ではあるが改めて問われると、私自身子どもたちに人とは違った表現を強いていたことを認識した。また、何よりも子どもの価値観を作っていたのは私自身ではなかったのかと感じ、反省をした。何気なく行っている日々の実践ではあるが、このように視点を持つことで改善することができることを感じた。今回は集団制作の中における実践であったが、個の活動などにもスポットを当てながら実践を進めていきたい。

<注および参考文献>

- 1) 若元澄男：「美術教育！だれのため？なんのため？-たかが美術教育/されど美術教育-」，月刊「学校教育 No. 1132」，pp. 6-13，広島大学附属小学校学校教育研究会第一編集部，2011.
- 2) 吉川和生，中島敦夫，大和浩子，内田雅三，中村和世：「美意識を育む図画工作科・美術科の授業開発―創造的思考力の育成とかかわって―」，広島大学学部・附属学校共同研究紀要，No. 39，pp. 255-260，2011.
- 3) 佐々木達行：「自分らしさが輝く図工の活動」，p. 14，1995，日本書籍.
- 4) 佐々木秀樹：「子ども主義宣言 子どもたちのリアルと図工の時間」，pp. 17-18，2008，三晃書房.
- 5) 梶田叡一：「教育評価[第2版補訂版]」，pp. 36-39，2002，有斐閣双書.
- 6) 日本造形研究会：「図画工作学習指導書5・6年上 指導実践事例編」，pp. 10-11，2011，開隆堂.